
「原発閉塞隅角緑内障に関連する新規5染色体
領域の同定」に関する掲載記事

【平成28年4月5日（朝刊） 報道分】



京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE

緑内障 早期治療に光

京都府立医大など 遺伝子変異 確認

2016.4.5(X) 京都府立

失明につながる緑内障のうち、眼圧が高まって発症する型にかかわる遺伝子変異を、京都府立医大などの国際研究グループが突き止めた。緑内障は早期治療が重要で、今回の成果をもとに診断キットの開発を進めている。米科学誌「ネイチャー・ジェネティクス」電子版に5日発表する。

緑内障は、網膜の神経細胞が傷ついて視野が損なわれる病気。このうち、眼圧が高まって発症する「原発閉塞隅角緑内障」は、国内では40歳以上の0・6%がかかっているとされる。点眼薬などで眼圧を下げて進行を抑えるが、根本的な治療法はない。

研究には24カ国116施設が参加。患者約1万人と、患者でない約3万人の遺伝情報を分析したところ、発症のリスクを1・15〜1・4倍高める変異が染色体上の8領域で見つかり、五つは初確認だった。眼圧の上昇は、目の中の水分の出口が狭くなっている。今回見つかった変異は、こうした働きに関わるたんばく質の量の異常に関係している可能性があるという。グループの田代啓・京都府立医大教授は「発症のリスクが高い人が早く治療を受けられるよう、1年以内に診断キットの開発を目指したい」と話している。(阿部彰秀)

急性の多くを占めるタイプ

緑内障の遺伝子変異 解明

2016.4.5(X) 京都府立

急性緑内障の多くを占める「原発閉塞隅角緑内障」の患者に多い五つの新たな変異を、京都府立医大の田代啓教授や木下茂教授らのグループが突き止めた。これらの変異は、目の中を循環する水分の排出システムに関するタンパク質の量を変化させるとみている。

府立医大グループ 発症リスク 診断期待

5日発表する。

同疾患は、目の中を循環する水分が十分に排出されず、眼圧が高くなって発症する。日本人では40歳以上の0・6%が発症するとされる。グループは、アジアや欧米の患者約1万人と、患者でない約3万人の遺伝子配列を比較し、

「原発閉塞隅角緑内障」の患者に多い五つの新たな変異を見つけた。一つの変異があると発症率が1・2〜1・3倍となり、複数あるとさらに高まる。これらの変異は、目の中を循環する水分の排出システムに関するタンパク質の量を変化させるとみている。

(松尾浩道)

治療を受けられるよう、1年以内に診断キットの開発を目指したい」と話している。(阿部彰秀)

緑内障の遺伝子変異解明 急性タイプのリスク診断期待

急性緑内障の多くを占める「原発閉塞(へいそく)隅角緑内障」の患者に多い遺伝子変異を、京都府立医科大の田代啓教授や木下茂教授らのグループが突き止めた。発症リスクの診断や治療薬の開発につながる成果で、英科学誌ネイチャー・ジェネティクスで5日発表した。

同疾患は、目の中を循環する水分が十分に排出されず、眼圧が高くなって発症する。日本人では40歳以上の0.6%が発症するとされる。

グループは、アジアや欧米の患者約1万人と、患者でない約3万人の遺伝子配列を比較し、患者に多い五つの新たな変異を見つけた。一つの変異があると発症率が1.2~1.3倍となり、複数あるとさらに高まる。これらの変異は、目の中を循環する水分の排出システムに関係するタンパク質の量を変化させるとみている。

グループは、緑内障では患者が最も多い「原発開放隅角緑内障」などの遺伝子変異の解析も行っている。田代教授は「血液から緑内障の発症リスクを簡単に調べられる検査キットの開発も進めており、予防的な治療である先制医療につなげたい」と話している。

【2016年04月05日 08時32分】

Copyright (c) 1996-2016 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

ネットワーク上の著作権について 新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様へ(日本新聞協会)

電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて

緑内障発症にかかわる遺伝子変異特定 京都府立医大など

阿部彰芳 2016年4月5日06時54分

失明につながる緑内障のうち、眼圧が高まって発症する型にかかわる遺伝子変異を、京都府立医大などの国際研究グループが突き止めた。緑内障は早期治療が重要で、今回の成果をもとに診断キットの開発を進めている。米科学誌ネイチャー・ジェネティクス電子版に5日発表する。

緑内障は、網膜の神経細胞が傷ついて視野が損なわれる病気。このうち、眼圧が高まって発症する「原発閉塞隅角（へいそくぐうかく）緑内障」は、国内では40歳以上の0・6%がかかっているとされる。点眼薬などで眼圧を下げて進行を抑えるが、根本的な治療法はない。

研究にはシンガポールなど24カ国116施設が参加。原発閉塞隅角緑内障の患者約1万人と、患者でない約3万人の遺伝情報を分析したところ、発症のリスクを1・1～1・4倍高める変異が染色体上の8領域で見つかり、五つは初確認だった。

眼圧の上昇は、目の中の水分の出口が狭くなって起きる。今回見つかった変異は、こうした働きに関わるたんぱく質の量の異常に関係している可能性があるという。グループの田代啓（けい）・京都府立医大教授は「発症のリスクが高い人が早く治療を受けられるよう、1年以内に診断キットの開発を目指したい」と話している。（阿部彰芳）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.